ユーミンのオリジナルアルバムを全部聴く

本間ひろむ

あの頃の青春も、
今の胸の高鳴りも。

『ひこうき雲』から『Wormhole/Yumi Arai』まで、
40枚のオリジナルアルバム
を聴きながらたどる
ユーミンの音楽と、私たちの50年。

本を閉じたら、きっと
ユーミンを聴きたくなる！



ユーミンのオリジナルアルバムを全部聴く

本間ひろむ

星海社

405

SEIKAISHA SHINSHO

まえがき

大学入試の小論文で、ユーミン論を書いた。

もう数十年前のことだ。

大阪芸術大学芸術学部文芸学科の入試（東京会場）で、「私の好きな芸術家」というテーマの小論文が課されたのだ。

今なら、誰をチョイスするのか、どんなレトリックを使って60分で小論文を仕上げるのかが問われているんだな、とすぐにわかる（今どきの就活生が訊かれるガクチカに近い感覚だろう）。その時はそこまではわからなかったが、ただ、ファン・ゴッホを書いても受からないな、とは直感していた。

そして「私の好きな芸術家は、松任谷由実である」と冒頭で高らかに宣言し、僕は《14番目の月》は「徒然草」の「花は盛りに月は隈なきを〜」の世界観を踏襲しているのだ、とか、《翳りゆく部屋》と《朝陽の中で微笑んで》は日本人固有の価値観である「もののあ

はれ」を表現してると好き勝手に書いた。

もちろん音楽的な新しさも書きましたよ。コード進行ありきで曲作りをするその界隈のシンガーソングライターとは違い、ユーミンはメロディ先行でそこに細かい和音（コード）で表情づけをしていくスタイル。ピアノという楽器のパフォーマンスを十分にいかして複雑なコード進行も駆使し、「その映像的な詞の世界をいきいきと造形した」と。そうしたユニークな音楽的なアプローチと、美大出身の美意識とがあいまってできあがった楽曲は「商業音楽の枠を超えて、もはや芸術である」と。

そしてめでたく、大阪芸術大学に入学した。それが１９８２年の話。

翌１９８３年、成人式の代わりに（語学の後期テストのため式に出ずに東京から大阪へ戻ったのだ）ユーミンの中野サンプラザでのライヴを観た。

その朝、中野サンプラザのユーミンか、新宿紀伊國屋ホールの夢の遊眠社のどちらかを見ようと思っていたら、朝刊に「当日券あり」の文字があったのだ。そう、ユーミンのコンサート『PEARL PIERCE ようこそ輝く時間へ』ツアーの東京公演（中野サンプラザの後はＮＨＫホールでのツアーファイナル）の新聞広告に。

かくして、中野サンプラザの窓口に並んだ。最後尾。ダフ屋に声をかけられたが無視。

順番が来た。

「お一人様ですか？　S席一枚ご用意できますが」

「それをください！」

チケットを見ると、前から4列目、中央やや下手側の通路際。むちゃむちゃいい席だ。

ステージが始まった。当然だが、目の前のすごく近い場所でずっとユーミンが歌っていた。《かんらん車》や《丘の上の光》というレアな曲も演奏されたその日のステージのアンコールは、《カンナ8号線》からの《DESTINY》（もちろん総立ち！）。

そんな中、ある曲でユーミンが客席の最後列のドアから現れ、歌いながらステージに向かって歩いて来た。そして、ゆっくりとすぐ横を通り過ぎた。

ユーミンが成人のお祝いをしてくれたのだな、と思った——。

昔から、チケットぴあに並んだり（昭和の頃は行列したのだ）、電話をかけまくったりして何かのチケットを取ったことはほぼない。この日のチケットも、キミのために取っておいたよ、とユーミンにいわれてるような気がした。

あれから、何だかんだいってずっと好きなことをして暮らしている――。
あの時、そう、ユーミンが歌いながら僕の横を通り過ぎた時、ユーミンから一生分のGood Luckを分けてもらったんだな、と、今になってしみじみ思う。

そんなユーミンが２０２２年の「デビュー50周年」をサーッと走り抜け、２０２５年に40枚目のオリジナルアルバム『Wormhole / Yumi Arai』をリリースした。
このアルバムでは、ＡＩを使って荒井由実と松任谷由実のコラボを見せてくれたりした（ユーミンは、いくつになっても何か新しいことをやらないと気がすまないらしい）。
僕が成人式の代わりに観たステージが13枚目のアルバム『PEARL PIERCE』のツアーだったことを考えると、あれからずーっと第一線で走り続けたんだな、ユーミンは。
だってオリジナルアルバム40枚だもん。
ということで、その40枚を聴いて、解説します。
その長いキャリアで、『YUMING BRAND』『ALBUM』『Neue Musik』『sweet,bitter sweet YUMING BALLAD BEST』『ユーミンからの、恋のうた。』『ユーミン乾杯!!』『ユーミン万歳!』などのベストアルバムや『YUMING VISUALIVE DA・DI・DA』『Yumi Arai The

Concert with old Friends』などのライヴアルバムをリリースしているが、こうしたアンユージュアルなタイトルは本書では扱わない。

オリジナルアルバム40枚だけです。

ただ、ユーミンのキャリアの初期には《あの日にかえりたい》《翳りゆく部屋》《潮風にちぎれて》《遠い旅路》《消灯飛行》《ナビゲイター》《VOYAGER～日付のない墓標～》《星のルージュリアン》といったベストアルバムのみに収録されている名曲もある。こちらはまた別の機会に触れたいと思う。

ともかくユーミンは、シングルで世の中を引っかきまわす旧来の日本の歌手ではなく、アルバムで勝負するタイプのアーティストだったのだ。

そんな中での40枚のアルバムは貴重なプロパティだ。

さて、本書では松任谷由実のことをユーミン、松任谷正隆をマンタさんと呼ぶことにする。業界ではみんなそう呼んでるので。

目次

まえがき 3

1970's

Spring Break 13

ひこうき雲 22

MISSLIM 26

COBALT HOUR 30

14番目の月 34

紅雀 38

流線形'80 42

OLIVE 47

悲しいほどお天気 51

1980's Still Life 55

時のないホテル 60
SURF&SNOW 64
水の中の ASIA く 68
昨晩お会いしましょう 72
PEARL PIERCE 76
REINCARNATION 80
VOYAGER 83

1980's SHANGRILA 87

NO SIDE 92

DA・DI・DA 96
ALARM à la mode 100
ダイアモンドダストが消えぬまに 104
Delight Slight Light KISS 108
LOVE WARS 112

1990's

Reference 117

天国のドア 123
DAWN PURPLE 127
TEARS AND REASONS 131
U-miz 135
THE DANCING SUN 139
KATHMANDU 143

Cowgirl Dreamin' 146
スコアの波 150
FROZEN ROSES 154

21ST CENTURY Ever Green 159

acacia（アケイシャ） 165
Wings of Winter, Shades of Summer 169
VIVA! 6×7 173
A GIRL IN SUMMER 177
そしてもう一度夢見るだろう 181
Road Show 185
POP CLASSICO 189
宇宙図書館 193

深海の街 197
Wormhole / Yumi Aral 201
配信で聴くユーミンのオリジナルアルバム 205
あとがき 228
参考文献・ウェブサイト 231

1970's

Spring Break

高校生でプロの作曲家になった少女

東京八王子に暮らすその少女は、ティーンエイジャーの頃から六本木のディスコに通い、アーティストや役者の卵が集まる飯倉片町のイタリアンレストランの常連になっていた。彼女のテリトリーはほかにもあった。東京都下の米軍キャンプ、御茶の水美術学院、そして三田にあるアルファレコード（スタジオは晴海）。

彼女の名前は荒井由実。

荒井由実はオリジナル曲のスコアをせっせとそのレコード会社に持ち込んでいた。

そんな中の一曲が、加橋かつみのシングル『愛は突然に…』として世に出た。

作詞／加橋かつみ、作曲／荒井由実。そう、ユーミンは14歳のときに書いたといわれているその曲でプロの作曲家になったのだ。１９７１年5月リリースなので、高校3年生である（そして、この曲はのちに《翳りゆく部屋》として生まれ変わる）。

ほどなく、ユーミンは東京藝術大学受験に失敗し、多摩美術大学に入学する。

「大学1年のときに『返事はいらない』っていうシングルを出したの。B面が『空と海の輝きに向けて』という曲。両方『ひこうき雲』に入ってますけど、違うバージョンなの。それ

は昔の仲間に協力してもらって、幸宏とかムッシュと一緒にとったわけ。アルファ・レコードの村井さん（社長）のほうとしても、試験的にシングル盤をつくらしてみようという感じだったんだと思う。自分でアレンジもして、全部自分でやって一枚出したのね。だけど、売れたのは三百枚ぐらいだったかな」

（松任谷由実『ルージュの伝言』）

プロのシンガーソングライター、荒井由実の誕生である。「幸宏」は高橋幸宏、「ムッシュ」はかまやつひろし。

デビューアルバム『ひこうき雲』に収録される2曲とはアレンジが違う。

シングルヴァージョンのユーミン自身による清廉かつフォーキーなサウンドに比べ、アルバムヴァージョンのマンタさんたちによるアレンジは少しリズムを跳ねさせつつのウエストコーストを思わせるキャラメル・ママのサウンド。

この頃のユーミンについて語っている、彼女の音楽には欠かせないドラマー2人の対談から引いてみる。

「林　僕は学校まで5分だからね。予鈴が目覚ましで（笑）、そこからトーストくわえて家を出て、信号待ちでネクタイを締めながら行って間に合っちゃう。

――学校から近いと友達の溜まり場になりませんでしたか？

幸宏　林の家はそうでもなかったよね。僕はよく行ってたけど。小原もよく林の家に行ってたよね。

林　幸宏の家は広かったから溜まり場になってたよね。

幸宏　高校2年くらいのときは、家に帰るといつもユーミンがいたし（笑）、林も大学くらいのときはウチにしょっちゅういたよね」

（『リズム&ドラム・マガジン』TOKYO BACKBEAT TALK～林 立夫×高橋幸宏 2023/03/03）

「実家太い系」たちが集った場所

林立夫は青山の骨董通り沿いに住んでいた。初等部から通う青山学院は目と鼻の先である。高橋幸宏の実家は目黒区大岡山の邸宅。彼も立教中学から立教高校、武蔵野美術大学短期大学部と進んだ。2人とも実家が太い（お金持ち）系である。

高橋幸宏とユーミンは同じ立教大学の付属高校同士で友人だったのだ。

「最初のシングルができたときは、やっぱりうれしかった。やっぱりね、盤になったから。今考えると、最初からメジャー志向ではあったと思うのね。やっぱり商人の娘だからさ。商品として出したものは売れなきゃしようがないっていう感覚はどっかに持ってたんだろうと思う」（松任谷由実『ルージュの伝言』）

とユーミン自身も語っていたように、最初からメジャー志向だった。

いわゆるひとつの大店（八王子にある呉服店）の娘だったのである（実家太い系です）。彼女が予言（!?）したとおり、彼女はさまざまなシーン（時代）でもきっちりメインストリームの真ん中にいる。

ただ、何もかもがうまくいっていたわけではない。

「ユーミンは村井さんが連れてきたんです。その頃、彼女はアルファに自分の作品を持ち込んできていて、72年にはムッシュかまやつさんのプロデュースで『返事はいらない』のシングルを出しています。その時は、僕は全く知らないのですが。出会ったときからユーミンは『自分は作家になりたい』としきりに言っていた。彼女が19歳、僕が27歳の時です。それで

作品を聴かせてもらったら、これが素晴らしい、今までの日本にはないような音楽だった。でも、いくら作家でやっていくにしても、誰がこの作品を歌えるのか思いつかなかった」

（『note』ALFA MUSIC　第1回有賀恒夫さん（前編）2021/11/29）

と語るのはアルファレコードで制作をしていた有賀恒夫氏。

「村井さん」とはアルファの社長の村井邦彦。ユーミンをはじめ、ハイ・ファイ・セット、YMOといったアーティストのレコードを世の中に送り出した人物だ。

フィリップス・レコードの本城和治きっかけでのユーミンとの出会いについて語る村井邦彦の回想を聞いてみよう。

「加橋かつみのパリで録音した作品も本城さんの仕事なんですが、パリ録音の次のアルバムを日本録音で作ることになって、本城さんに曲を依頼されて僕も1〜2曲書いたのかな。その録音にビクターの青山スタジオに行ったら、僕の前に録音した曲をかけていて、それがすごくいい曲なんですよ。『これいい曲だね。誰が書いたの?』って聞いたら、『これはユーミンっていう若い子の曲』って言うんですよ。それで加橋かつみにユーミンを紹介してもらっ

て『あなたは才能があるから、うちの作家になりませんか?』って声をかけたんです。
そうしたらユーミンはまだ高校生だったので、半年か一年ぐらいして彼女が多摩美に入ってから作家として契約しました。当時は毎日学校が終わると渋谷からバスに乗って、三田のアルファミュージックに来て曲を書きためていました。だからスタジオができあがる頃には持ち曲が15曲とか20曲とかあったと思います。それで、かまやつさんのプロデュースで東芝（現EMIミュージックジャパン）からシングル盤を一枚出したんですが全然売れなくて、今度は細野に頼んで『ひこうき雲』の録音に入るわけなんですね。

（中略）

最初の出会いは作家としてですからね。歌だってそんなに上手いわけではないし。でも、なんか彼女独特の魅力があったんですよね。あと、シンガーソングライターの時代にだんだん変わっていくときだったのも大きいですね。そういう自然な成り行きで彼女自身が歌うことになりました」

（「Musicman」インタビュー　第88回　村井邦彦氏 株式会社ヴィラス ミュージック 代表取締役会長／作曲家　2011/1/21）

「歌手・荒井由実」を引き出した大人たち

そうはいうものの、こんな証言もある。

「そうしたら村井さんが、雪村いづみさんに歌わせようって言い出して、僕は『ええっ⁉』となったんだけど、村井さんの命令は絶対ですから（笑）。それで『ひこうき雲』をレコーディングしたんですが、上手いんだけど、どうもテイストが合わない。これはユーミン自身が歌うのがいいんじゃないか、と思って、『ひこうき雲』と『雨の街を』『紙ヒコーキ』の3曲を弾き語りで歌ってもらいました」

（『note』ALFA MUSIC　第1回有賀恒夫さん（前編）2021/11/29）

その頃のことをユーミンもこう回想している。

「歌うことになったきっかけは、『その声じゃないと、君の楽曲の世界観は出せない。歌いなさい』と、プロデューサーの村井邦彦さんに言われたこと。ただ『ひこうき雲』のレコーディングはとにかく大変でした。ディレクターの有賀恒夫さんがピッチの鬼で、何度も歌い

直しをすることになって。当時はパンチイン、パンチアウトがやっと始まった頃で、もちろん編集なんてできない。『ピッチが良くない』と言われ続け、とにかく歌録りに時間がかかったんです。丸1年、ずっと歌っていた印象がありますね。いま思えば、理想とする歌が録れるまで、まわりの大人たちが根気強く待ってくれていたのだと思います」

（『ぴあ』ユーミン自身が語る〝アルバムとその時代〟第1回　2018/11/29）

こうしてデビューアルバム『ひこうき雲』が1973年11月20日にリリースされる。

ひこうき雲

1973/11/20



オリコン　9位

01. ひこうき雲
02. 曇り空
03. 恋のスーパーパラシューター
04. 空と海の輝きに向けて
05. きっと言える
06. ベルベット・イースター
07. 紙ヒコーキ
08. 雨の街を
09. 返事はいらない
10. そのまま
11. ひこうき雲

「『ひこうき雲』のアルバムを録音し始めたのが大学一年の終わりで、二年の暮れに出たの」

（『ルージュの伝言』松任谷由実）

アルバムの1曲目とラストに《ひこうき雲》。
この曲を含め、アマチュア時代に書き溜めた珠玉の楽曲がアルバムを飾る。

Musician & Staff

Producer : 村井邦彦
Artist : 荒井由実
Composer/Author : 荒井由実
Arranger : 荒井由実、キャラメル・ママ
Strings Arrangement : 宮本光雄
Chorus Arrangement : シンガーズ・スリー
Vocal : 荒井由実
Piano : 荒井由実
Bass : 細野晴臣
Keyboard : 松任谷正隆
Guitar : 鈴木茂
Drums : 林立夫
Tenor Sax : 西条孝之介
Nylon-String Guitar : 細野晴臣
Percussion : 林立夫、鈴木茂、松任谷正隆、小原礼
Flute : 宮沢昭
Side Vocal : 松任谷正隆
Chorus : シンガーズ・スリー
Hand clapping : Recording Staff
Banjo : 松任谷正隆
Steel Guitar : 駒沢裕城

「『ひこうき雲』に収録されている『ひこうき雲』『空と海の輝きに向けて』『ベルベット・イースター』『雨の街を』『返事はいらない』『そのまま』『紙ヒコーキ』などの楽曲は、ミドルティーンの頃に作っていて、リリースの2年前くらいからデモテープにしていました。その他の曲、『曇り空』『恋のスーパーパラシューター』『きっと言える』などはアルバムの制作と並行して書いた曲です」

（『ぴあ』ユーミン自身が語る〝アルバムとその時代〟第1回　2018/11/29）

ミドルティーンといえば高校生。よくみずみずしい感性というが、《ひこうき雲》《空と海の輝きに向けて》《ベルベット・イースター》《雨の街を》《返事はいらない》といった曲を聴くと、天才少女のデッサン画を見るように鮮烈だ。

「演奏はキャラメルママ（細野晴臣、松任谷正隆、鈴木茂、林立夫）。村井さんに『この人たちと一緒にやるから』と聴かされた音源が、カントリーだったんですよ。土くさい感じのサウンドというのかな。彼らは多様な音楽性を持ったグループですが、ちょうど同じ時期に制作していた小坂忠さんのアルバムもジェイムス・テーラーを下敷きにしていたようだし、たまたまそう

いう音楽に傾倒していたんだと思います。ただ、当時の私はイギリスのプログレッシブ・ロックが好きだったので、『え？　この人たちとやるの？』と〝？〟がたくさん浮かんだままスタジオに行ったことを覚えています」

（『ぴあ』ユーミン自身が語る〝アルバムとその時代〟第1回　2018/11/29）

ユーミンの作曲家としてのデビューシングル、加橋かつみのシングル《愛は突然に…》を聴くと、彼女自身が語るとおりヨーロッパの香りが強い。

一方、デビューアルバムを聴いてみると、キャラメル・ママのカラッとしたアメリカンなサウンド。そしてノンビブラートの突き放すような歌い方をするユーミン。シングル《ひこうき雲》《空と海の輝きに向けて》で聴かれる細かいビブラートも、アルバムでは消えているのだ。

そんなユーミンとキャラメル・ママだがケミストリーが合うとはこのことで、意外にひとつのスタイルができあがっているのが興味深い。

《ひこうき雲》は２０１３年公開の映画『風立ちぬ』の主題歌になった。若い世代のファンはここからユーミンを知った人も多い。

次世代による次世代のための

武器としての教養
星海社新書

星海社新書は、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて、ここに創刊いたします。本の力を思いきり信じて、**みなさんと一緒に新しい時代の新しい価値観を創っていきたい。若い力で、世界を変えていきたいのです。**

本には、その力があります。読者であるあなたが、そこから何かを読み取り、それを自らの血肉にすることができれば、一冊の本の存在によって、あなたの人生は一瞬にして変わってしまうでしょう。**思考が変われば行動が変わり、行動が変われば生き方が変わります。**著者をはじめ、本作りに関わる多くの人の想いがそのまま形となった、文化的遺伝子としての本には、大げさではなく、それだけの力が宿っていると思うのです。

沈下していく地盤の上で、他のみんなと一緒に身動きが取れないまま、大きな穴へと落ちていくのか？　それとも、重力に逆らって立ち上がり、前を向いて最前線で戦っていくことを選ぶのか？

星海社新書の目的は、**戦うことを選んだ次世代の仲間たちに「武器としての教養」をくばることです。**知的好奇心を満たすだけでなく、自らの力で未来を切り開いていくための〝武器〟としても使える知のかたちを、シリーズとしてまとめていきたいと思います。

2011年9月

星海社新書初代編集長　柿内芳文

SEIKAISHA
SHINSHO